



## 特別寄稿

# コロナ禍で皆さんに知って頂きたいこと ～医療の現場から～

インターパーク倉持呼吸器内科 院長 倉持 仁

**私は**一時期福島県で幼少期を過ごしましたが、宇都宮市の陽光小学校、陽南中学校、宇都宮高校を卒業し、1年間の浪人生活を東京で送ったあと東京の大学に進学しました。

大学生時代はあまり真面目に勉強していませんでしたが、医師になった1998年からの10年間、朝は7時から夜はいつも0時過ぎ、病院に行かない日はなく、休みをとったことも毎年1週間の夏休み以外はありませんでした。

**今は**時代が違い怒られてしましますが、そのような生活の中で鍛えられたと思いますし、良い経験だったと思います。

2008年に都内の病院から出身地である宇都宮に戻り、地域医療に従事してきました。慣れ親しんだ土地での仕事であり、多くの地元の方々に助けを頂きながら、診療に当たることができました。皆様に感謝申し上げます。

それまでの自分の専門分野は、呼吸器内科・アレルギー疾患であり、肺がんや喘息、間質性肺炎、肺炎やインフルエンザなどの感染症の診断と治療でした。

特に過敏性肺炎という羽毛布団などの鳥関連抗原やカビが原因で起きるアレルギー性の間質性肺炎の研究に従事していました。患者さんのご自宅に伺いその生活環境を、床下に潜ったり、屋根裏を覗いたりしながら百件以上調査したことが懐かしく思い出されます。

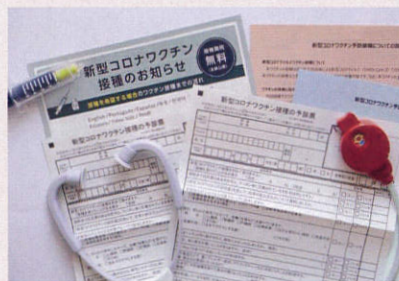
**2008年**に宇都宮に戻り、整形外科患者さんの全身管理、内科の救急医療などに従事しながら3年間宇都宮南警察署の警察医として年間約300例の検死業務に携わる機会を得ました。

少子化・高齢化・孤立・老々介護・貧困などの問題が積み上がっていく中で、現実と何か遠い世界にも感じる悲慘な現場を目にして、これはな

んとかならないのかと日々悩んだことを思い出します。考えすぎてお酒を飲みすぎて眠れなくなったこともありました。

小さな子供を車に残して電車に身を投げたお母さん。亡くなってから1ヶ月以上も経過して発見された腐乱しうじの沸いたご遺体。認知症の妻を抱え服毒自殺した夫とその後自宅の掘り炬燵に転落して亡くなった認知症の妻。数日前にペースメーカーを入れ、その後ゴミの山の中、年長いた姉妹だけが寝ることができる1メートル四方のスペースで亡くなられた姉とそれをみている妹。

それまで医師の仕事だけをしていれば良いと考えていましたが、それでは世の中のためにならないことに気づきました。



**地域の中**で医療に取り組みながら、自分には何ができるのだろうと、常にできることを模索しながら過ごしていました。そんな折、2020年2月からコロナ禍がはじまりました。

もともと2015年から感染対策を施した発熱外来を有している当院では速やかに未知の感染症に対する診療を行うことができました。できるだけ発熱で困った患者さんの役に立つようにすることを目標にさらに診療体制を整えました。

そのような中で次第にテレビに出演したり、Twitter(ツイッター)などのSNSを通じて発信を行いました。正しいコロナの病態の把握や、有効な感染対策について手探りではあ

りますが、今までの医師としての経験と最新の現場から得られる知見をもとに、より良くするにはどうしたら良いかという目的を持ち、発信をしています。

**人の役に立つ**ことが大切と育てられ、人の命は尊いものと思っています。

そのような明確な目的があったため、私は発言も行動もブレずに行えていると思います。

コロナの外来診療体制を構築し、今まで4000人以上の新型コロナウイルス感染症患者さんの診断を行ってきました。

**ただのクリニックですが**、集中治療室も備えるコロナ専門病院も作ることができました(17床)。一開業医にもかかわらず、患者さん、職員方の協力を得て、唾液の遺伝子解析、臨床データの集積、治療、経過観察を通して日本でも有数の新型コロナウイルス感染症の医学的データを集めることができるようになりました。

**その結果**、世界一流のNatureという科学雑誌にも著者の一人として載せていただくことができました。

人の役に立つこと、人の健康と命は世界で一番大切なものの一つであること、そしてそれを守るために全力を尽くすこと、単純ですが、とても大切なことだと思います。

**強い信念と目標(夢)**を持つことでどのようなことも実現できるということを子供達にはぜひ知ってほしいと思います。

人の役に立つことには価値があり、人の命は尊いことだと、やはり強い信念と明るい希望を高齢の方達が持っていていただくことで、今の社会は必ず良い方向に向かっていくと思います。

**明るい希望と高い目標**(大きな夢)を持ち、強い信念のもと行動すれば必ず道は開けるということをコロナ禍から学びました。

# 倉持仁先生に聞いてみました!!

## 質問1) ワクチン接種について?

ワクチンの接種に関しては子供を含め、必要であると思います。ただし、そのための環境を整える必要があります。

コロナウイルスは時時刻刻と変異を続け、起こす波ごとに感染する世代を変え、病態を変えてくる狡猾な面があります。デルタ株やオミクロン株になり、2回のワクチン接種ではウイルスを十分殺す効果がなく、3回目の接種が必要なことがわかってきました。(そこを検証したデータの一部も Nature に載っています。)

「なんだ、初めはワクチン2回打てば感染を広げないという話ではなかったのか」「子供たちは重症化しないのだからつらい副反応が心配だから控えよう」と親御さんが思うことも納得できます。

しかし、一方ではコロナに感染しても中和抗体は出来にくいこと、ワクチン未接種の方は重症化率が高いこと、ワクチンの効果は時間と共に減弱すること、などがあり、ポストコロナを迎えるにはしばらくの間、年1~2回のワクチン接種が必要になってくると思います。ワクチンを複数回打っておき、基本的な免疫を得ておけば危険な株が出現しても、追加のワクチン接種で比較的短時間で免疫を得ることができます。子供での副反応は重篤なものは少ないなどのデータも出てきており、過剰に心配する必要はないと思われます。一方、ワクチン接種後の副反応などで速やかに医療機関を受診できなかつたり、冷たい対応をされたりという現状もありますので、ワクチン接種後の副反応も含めてきちんと対応・相談できる環境づくりが自治体・医療機関には求められていると思います。

## 質問2) どのような状態になればコロナ前のように戻れるか?

どのような状況になればコロナ前のように戻れるか、と言いますとコロナの前のようには戻らないと思います。これは悲観的な意味ではなく、例えてみましたら、原始時代は手洗い・マスクがなかったことを考えるとわかりやすいと思います。


飛沫・エアロゾル・接触感染の対策が一般社会の中で進むこと、具体的にはコロナの感染予防に見合った衝立の設置や換気扇、殺菌型空気清浄機の設置などが進むことが必要です。

また、速やかにPCR検査(か、PCR検査の感度に近いより簡便な方法)が受けられ、適正な期間他人にうつさないよう休める法整備、コロナと診断されたら、当たり前医療が受けられ、当たり前会社を休める環境・ルールづくりも必要です。

検査・隔離・治療が当たり前に行われ、ルールに従って社会が適切に対応できるような環境、インフルエンザを思い浮かべれば、検査を受けて当たり前診断されれば治療が受けられ、会社・学校も休めるルール環境が整うまでと思われます。

早期診断で重症化させない医療で  
患者を救い続けた  
闘う臨床医の記録

コ  
ロ  
ナ  
戦  
記



倉持仁の

インテーク呼吸器内科院長

倉持仁の

国民皆保険を  
崩壊させる  
政治でいいの  
か?

外来で投薬治療  
変異株ゲノム解析  
抗体価測定などを  
自院で開始

PCR検査  
CT・病棟建設  
コロナ病棟建設

患者の自宅放置を  
やめよと訴え、  
無策の政府に代わり  
奔走した理由を、  
生い立ちから  
明らかに

泉可書房

(Nスタ(TBS))で  
菅前首相、小池都知事に  
辞任勧告して  
ツイッターのトレンド  
1位になった医師  
初の著書